

## 忘れられた乳幼児の

### 環境教育について

和泉乳幼児院 砥 上 種 樹

(一) 特に乳幼児の環境教育の重大であることは、誰も否定するものはないが、その体験においては、科学性が乏しく、しかも環境設定において、最も大切な人的環境の中でも保育者自体と、その保育者群の生活雰囲気をよくすることが忘れられている。

(二) 更に、物的、事件的、大自然などの環境設定に努力していても、児童の本能を敬い、それが環境にありて行動するそのものを教育的素材とすることを忘れている。換言すればカリキュラムを立てる時は、ともかく、出来上った案に捉われがちである。

(三) 乳幼児は、本能の躍動のまま無意識的、未分化的に、環境にまねまなびつつ成熟していくのである。たとえば、環境という畑に本性の種が芽生えて、本能という自力が、その他の環境のさまさまに順応したり抵抗したりして成長するのを園丁が、それを敏く保護育成するようなものである。

(四) 保育者は一に環境の最大なものであると共に園丁の如く、対象を咎めず叱らず、あるいは春の陽の如く温かく輝いて語らず、うるみ眺めると共に、児童の本能のよき芽を助成し、然らざるを洗い清

めてやることでなければならぬ。

それには、児童と一つ心にとけ合って生活を共にし、決して対立的で、強要し、叱責したりして躰けてはならない。

(四) 乳児のころの本能感は、十分満してやらねばならない。ただ、基本的な、飲食、睡眠、排泄、保温、清潔などは科学的に躰けるが、それにしても無理はいけない。これが幼児になって、必然的に現実感と衝突する。それは、自我の芽生え、心の離乳期とも云うべき過程である。この反抗期の教育も、何といつてもよき人的環境の中にあらしめることを忘れてならない。

(四) 要するに環境設定と本能尊重によって、心のしこりを昇華し、創作能力を助成しつつ人格の土台を形成することを祈念すべきである。

## 職業と幼児期の 環境について

厚生省

副島 ハ マ

四、五〇〇枚のアンケートを無作意抽出による調査の回答六八九をまとめたもので、結果と考察の要約は左の通りであった。

幼教（幼稚園教諭）保育（保育所保育）の職業選択理由は自分の意志によるもの五九%で全体の平均四五%より多く、現在の職業に